

Programme 日本語のプログラムは中面に記載しています

Opening Remark | Prof. Takami Matsuda (Director, KeMCo/ Professor, Faculty of Letters, Keio University)

Part 1: The Future Book-scape: New Challenges in Methodology and Context

The Curation of Collections of Books and Archives and the Study of Material Culture
— An Exploration of a Methodological Challenge

Dr Kristian Jensen (Former Head of Collections and Curation, the British Library / Chair of the Consortium of European Research Libraries)

Book as Vibrant Archive — New Scientific Approaches to Old Books

Prof. Alexandra Gillespie (Vice-president, University of Toronto and Principal, University of Toronto Mississauga)

Book-scape at KeMCo — Materiality of the Book in the Museum Context

Prof. Takami Matsuda (Director, KeMCo/ Professor, Faculty of Letters, Keio University)

Part 2: The Japanese Book-scape in the Global Context

The Art of the Book and Books as Art

Dr Alessandro Bianchi (Bodleian Japanese Librarian, Bodleian Libraries, University of Oxford)

On the Tradition of Miniature Books in Japan

Prof. Takahiro Sasaki (Chair and Professor, Keio Institute of Oriental Classics)

Modernization in Japanese Book Design: A Glimpse into the Meiji Period

Prof. Satoko Tokunaga (Professor, Faculty of Letters, Keio University)

Discussion

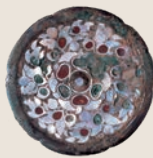
Dr Kristian Jensen, Prof. Alexandra Gillespie, Prof. Takami Matsuda, Dr Alessandro Bianchi, Prof. Takahiro Sasaki and Prof. Satoko Tokunaga | Moderator: Yu Homma (Assistant Professor, KeMCo)

Closing Remark | Yohko Watanabe (Vice director, KeMCo/ Professor, Keio University Art Center)

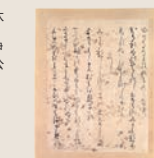
関連企画 慶應義塾ミュージアム・コモンズ グランド・オープン記念企画



大学に長い時間をかけて蓄積してきたさまざまな作品や資料—オブジェクトが出会い、オブジェクトにかかわる人びとが対話することによって開かれる景色の一端を、2つの展覧会と、シンポジウムによって紹介する企画です。
塾内の授業やゼミでの見学にも対応しています。お問合せください！



左：《女性頭部》BC1 後半—AC1 頃
右：大山エンリコイサム《FFIGURATI #314》2020 年



交景 クロス・スケープ

Cross-scapes: Interconnecting Art

2021 年 4 月 19 日 (月)— 6 月 18 日 (金)
10:00–18:00 土・日・祝休館 (5/29 開館)
慶應義塾ミュージアム・コモンズ (三田キャンパス東別館)

入場無料・事前予約制 塾生・教職員予約不要
詳細⇒bit.ly/3thfEss ご予約⇒bit.ly/3f31qYy

文字景 —— センチュリー赤尾コレクションの名品にみる文と象
場所と時代を超えて広がる文字文化の展開を、新たに慶應義塾に寄贈されるセンチュリー赤尾コレクションの名品と義塾に蓄積された資料を通して描き、その背後に広がる風景を探ります。

集景 —— 集う景色：慶應義塾所蔵文化財より
慶應義塾が所蔵する文化財のうち、卒業生の作品や、学内で形成された人的つながりをバックグラウンドにもつ作品を中心にをご紹介します。

Keio Museum Commons
慶應義塾ミュージアム・コモンズ

慶應義塾
ミュージアム・コモンズ
国際シンポジウム

本景

書物文化が作りだす連想の風景

Keio Museum Commons [KeMCo] International Symposium

Book-scape

Cultural landscape of Books and the Web of Associations

第1部 未来の「本景」——方法論と文脈における新たな試み

書物コレクション・アーカイブのキュレーションと物質文化研究——方法論的挑戦の探求
クリスチャン・イエンセン (大英図書館前収書・司書部長)

躍動するアーカイブとしての書物——古書への新たな科学的アプローチ
アレクサンドラ・ギレスピー (トロント大学 副学長)

KeMCoにおける書物の風景——書物のマテリアリティとミュージアム
松田 隆美 (慶應義塾ミュージアム・コモンズ 機構長/慶應義塾大学文学部 教授)

第2部 グローバルな文脈でみる日本の「本景」

書物の芸術とアートとしての書物
アレクサンドロ・ビアンキ (ボドリアン日本研究図書館 館長)

日本の特小本の伝統について
佐々木 孝浩 (慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 教授)

明治期の装丁が映し出す近代化の様相
徳永 聡子 (慶應義塾大学文学部 教授)

ディスカッション

ディスカッション・モデレータ| 間 友 (慶應義塾ミュージアム・コモンズ 専任講師) 閉会・閉会の挨拶| 松田 隆美、渡部 葉子 (慶應義塾ミュージアム・コモンズ 副機構長、慶應義塾大学アート・センター 教授)

2021年5月29日(土) 18:00-21:30 オンライン開催
Saturday 29 May 2021, 18:00 - 21:30 JST Online

お申し込み| ご参加には事前申し込みが必要です。 <https://bit.ly/3h5pefL> よりお申し込みください。
言語| シンポジウムは日・英のバイリンガルで開催されます。発表は英語あるいは日本語で行われ、翻訳が字幕で提供されます。
ディスカッションは日英両言語で参加可能です。
お問い合わせ・主催| 慶應義塾ミュージアム・コモンズ 03-5427-2021 hello@kemco.keio.ac.jp

Language| The symposium is delivered bilingually in English and Japanese. Papers are presented in English or Japanese, and translations are provided with subtitles. Discussions are available in both English and Japanese.
Registration| To join the symposium, please register via <https://bit.ly/3h5pefL>
Contact and Organiser| Keio Museum Commons 03-5427-2021 hello@kemco.keio.ac.jp

書物は、文化財であると同時に文化的実践です。書物が多様なアートのネットワークのなかで生み出す文化的風景、そして新たな視点の提供について多角的に検討します。

Panelists' profiles and abstracts in English are available on our website and PDF.



クリスチャン・イエンセン

2020 年 11 月の定年退職まで大英図書館収書・司書部長を務め、それ以前はオクスフォード大学ボドレアン図書館に勤務。コペンハーゲン大学で西洋古典と歴史を学び、フィレンツェの欧州大学院でアリストテレス哲学に関する論文で博士号取得。Conseil scientifique of École nationale supérieure des sciences de l'information et des bibliothèques 会員(2007-2013)、Lyell reader in Bibliography at Oxford (2008)、フランス国立古文書学校の訪問教授(2009)、書誌学会会長(2015-2018)を歴任し、現在は Consortium of European Research Librariesの議長を務める。



アレクサンドラ・ギレスピー

トロント大学ミシサガ校校長、トロント大学副学長、英文学および中世研究教授。中世および近代初期のテキスト・書物研究を専門とする。特に、写本から印刷本への移行、書物史と文学批評および批評理論の関係性、初期の書物生産技術のグローバルな展開、近代以前の書物に対するデジタル的および非破壊的な科学的アプローチを研究している。



書物コレクション・アーカイブのキュレーションと物質文化研究 ―方法論的挑戦の探求

本格的な図書館と強力な美術史の伝統をもつ、ある著名なイギリスの研究機関で、'Material World' というセミナーが最近開催された。その目的は、「歴史学、美術史、文化史、考古学、人類学、宗教史、博物館学など、幅広い分野の研究者や文化遺産の専門家を集結する」ことにあった。しかし、書物についての言及はなく、どうやら書物は、物質世界の重要な一部とは認識されていないようである。書物芸術の研究は確立していて、それが物質文化の研究とされている場合でも、美術史も博物館学も、書物を物質世界の一部として受け入れることを困難と感じてきた。

本発表では、この認識は定着したキャリアパターンとそれに関連する固定的な思考パターンによって確立、あるいは再確認されているものだが、この困難さは、書物の複雑な性質に起因する本質的に観念的なものであることを提案する。つまり、書物は意味の運び手だが、その意味は無限に複製可能で、それを運ぶオブジェクトから切り離しが可能と見なされているのである。このことは、私たちを取り巻く物理的な証拠とは対照的である。少なくとも西ヨーロッパでは、書物は、デジタル化以前の過去の遺物として、最も数多く残っているものの一つである。本を博物館の対象物として、あるいは博物館の対象物の文脈で考えたいのであれば、何故そのことが困難であったのかをまず理解しようとするのが有益である。本発表は、この知的挑戦の本質を理解することを目的とする。

躍動するアーカイブとしての書物―古書への新たな科学的アプローチ

書物は、人間が作った他のどのような人工物よりも多くの数で過去から伝わっている。過去の手作りの書物は、昔の人々の言語、文字、芸術、物語などの貴重な証拠にとどまらず、人間と非人間との出会いを伝えてくれる生きて躍動するアーカイブでもある。それは、言葉であると同時に、獣皮の調製であり鉱物顔料であり、インクだけでなく虫の痕跡もとどめており、宗教や政治の動乱だけでなく、疫病や気候の変化の証人でもある。

本発表では、「書物」を、自然界から採取され、文字の記録を残すために手作りされた書くための表面であると大きく捉えることとする (Gillespie, 2019)。書物は、巻物、紙葉、屏風、冊子、タブレット、さらには立石でさえありうる。無数のこうした書物が歴史のなかで失われ、生き残った書物もその秘密の多くを未だに隠したままである。私の発表では、これらの意味を明らかにし、多様なテキストやスクリプトを、書物の素材や物理的な構造、そして何層にもわたる付加物とともに読み解くためには、革新的で学際的な研究手法を結集する必要があることを指摘する。トロント大学の Old Books, New Science Lab が展開している、人文学的探求と技術的プロセスを融合した取り組み―本の内部構造をモデル化し、密度によって本の素材（木の種類など）を特定するためのμCT、ページや本の糊に使われている動物種を特定するための eZooMS と統合プロテオミクス、本につくカビや菌類を研究するための菌類学など―について論じる。

アレッサンドロ・ビアンキ

ボドリアン日本研究図書館館長、同図書館所蔵の日本書コレクションのキュレーター。ケンブリッジ大学で博士号を取得した後、大英図書館、スミソニアン博物館のアジア美術部門に勤務し、またハバフォード大学（ペンシルベニア州）で教鞭を執る。



佐々木 孝浩

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の教授で現在文庫長。専門は日本の書物史で、MOOC の FutureLearn で日本の書物と紙の 2 コース "Japanese Culture Through Rare Books" と "The Art of Washi Paper in Japanese Rare Books" のリーダー・エデュケーターを務める。



徳永 聡子

慶應義塾大学文学部教授。中世英文学を専門とし、ヨーロッパの印刷文化や日本における洋書受容の歴史についても研究している。



松田 隆美

慶應義塾ミュージアム・コモンズ (KeMCo) 機構長、文学部教授。西洋中世学会会長。中英語文学、中世文学におけるキリスト教信仰、中世および近代初期の紀行文学、中世写本および初期刊本の視覚的パラテキストを研究している。



書物の芸術とアートとしての書物

本は単にテキストではない。手書き写本や印刷物の制作において、アートは常に重要な役割を果たしており、何世紀にもわたって、書物を豊富なパラテキスト装置（挿絵、彩色、特注の表紙、書体、タイポグラフィ）で飾ってきた。20世紀に入って、前衛芸術、コンセプチュアル・アート、そして最近ではデジタル・アートというかたちで、書物が芸術的な試みの媒体、そして新しい美的感覚を広める手段となると、書物のかたちを用いたオリジナルのアート作品が創られるようになった。本発表では、アーティスティックな創意、パラテキスト、マテリアリティの関係性を通じて、書物生産においてアートが果たした役割を探る。

日本の特小本の伝統について

特小の書物は世界中に存在しているが、日本は特に長いその伝統を有している。年代が明確な世界最古の印刷物と言われる「百万塔陀羅尼（ひゃくまんとうだらに）」は、日本最古の特小本であるとも言える。以後日本では様々な形態や内容の特小本が作り続けられてきた。17 世紀に商業出版が確立すると、特小本の版本も盛んに製作されるようになった。それらには日本の書物の一つの特徴である、挿絵を有するものも少なくない。この発表では、できるだけ多くの現存例を対象として、その大きさや造本、内容の特徴などを確認しつつ、8 世紀から 19 世紀頃までの日本の特小本について、実用性・装飾性・趣味性など、その製作目的を幾つかに分類整理しながら、日本の特小本の歴史と伝統を辿ってみたい。

明治期の装丁が映し出す近代化の様相

書物は歴史の証人のごとく、社会的、文化的ならびに技術的変革を映し出す。本発表では、日本が西洋から政治経済や社会システムを導入することで近代化を遂げた明治期の書物生産に注目する。19 世紀後半、日本の印刷業は徐々に西洋化と機械化を遂げ、それに伴い書物の装いも和装本から洋装本へと変化していった。本発表では、こうした造本上の変化を、とりわけ旅行案内書を中心に検討する。明治期に出版された旅行書は、江戸時代からの名所図会などの伝統を引き継ぐ一方で、次第に、鉄道や海上航路等の発展の影響を反映するようになる。こうした変化をモノとしての書物にたどることで、本に刻み込まれた文化的風景の諸相を読み解く意義について一考を加えてみたい。

KeMCo における書物の風景―書物のマテリアリティとミュージアム

書物が固有にもつオブジェクトとしてのマテリアリティ（質感）は、本質的にメディアの一形態である書物を唯一無二の文化財へと転換させるが、マテリアリティは書物の可動性と不可分であることを認識する必要がある。可動性は文化財の本質だが、書物の可動性はそのパラテキストによって、オブジェクトと情報の両面で実現される点に書物の特徴がある。本発表では、そうした書物の質感と可動性が、ミュージアムの文脈によって如何により先鋭化されうるかを、KeMCo の試みとともに検討する。フィジカルな空間とデジタルなアーカイブが融合されたミュージアムでは、書物の質感を最新のデジタル技術によって捕捉するだけでなく、書物固有の可動性を再現、創造し、書物が持つ潜在的リアリティを拡張することがもとめられている。